地域を興す vol.3

子どもと大学生がつながる、地域の居場所の未来

OKB総研 委嘱コンサルタント
河合 達郎 氏 （一般社団法人 山学（やまなび） 代表理事）

教育格差や不登校児童・生徒の増加など、子どもたちをとりまく課題が山積している。私たち山学もこうした問題意識から、過疎が進む中山間地において学習支援や子ども食堂の場を開いてきた。活動の必要性を実感する一方で、居場所の存在意義をいかに高め、継続していくかといった点で難しさも感じている。そうした中、ヒントを得たいと思って訪ねたのが岐阜大学地域協学センター(注1)だ。地域における子どもたちの支援者や地域リーダーの養成などをめざし、学生たちが現場に入る形での実践的な授業(※)を開いている。「地域における子どもたちの居場所をつくる意義は?」「大学生が果たせる役割とは?」授業を受講した岐阜大学の学生7人に集まってもらい、経験を語ってもらった。

(※)岐阜大学地域協学センターが展開する社会教育士（社会教育主事）養成課程と次世代地域リーダー育成プログラム

「中津川の栗きんとんを食べる。元気が出たから3マス進む」

――子どもたちと関わる授業を受講したきっかけは?

加藤 社会教育士(注2)の資格を取りたいと思ったのがきっかけです。「地域科学部って何するの?」ってめちゃくちゃ聞かれるんです。だから、何かしら学びの成果がほしくて…。資格が取れる授業を履修していくうちに実習活動があったので、自然と参加していました。

新見 僕は最初、学芸員の資格を取るつもりでした。その過程でたまたま地域の教育に関わる授業を受けて、そっちの方がおもしろそうだなって。

森本 自分が中学生のとき、中学校と地域との連携が始まったところでした。正直、当時から強い関心があったわけではないですが、校長先生がよく「地域の目」という言葉を使っていたことだけは覚えていて。学校という枠だけにとどまらない形で教育を学びたいと思い、学校外の取り組みに参加できる授業を受けることにしました。

――それぞれいろんな現場に行かれたと思いますが、どんな活動に参加したのでしょう?

鈴木 放課後の学習支援に行ったほか、子どもたち向けの講座を自分たちで企画して実践するということもしました。私たちが企画した講座では、子どもたちに岐阜県の魅力を再発見してもらうということを目標にしました。単純に話しても子どもたちには伝わらないと考え、県内各地の魅力を盛り込んだすごろくを作りました。「中津川の栗きんとんを食べる。元気が出たから3マス進む」という感じです。子どもたちの目線に合わせて話すということは難しいなと感じましたが、大変だったからこそ印象に残っています。

小川 NEXCO中日本さんと一緒に1年間活動しました。その会社は地域との接点をもっと増やしたいという課題感があり、子ども向けイベントを企画して開きました。

西谷 岐阜県加茂郡八百津町の内堀醸造さんと一緒に、地域の子どもたちを対象とした料理教室に取り組みました。進学や就職で町を離れる子どもが多い中で、どうしたら町へ戻るという選択肢を子どもたちに検討してもらえるかを考えたときに、町への愛着が必要なんだろうと。そこで、地元で作られているお酢を使った料理教室を開いたのです。大人になっても八百津町のことを忘れないでほしい、という思いで活動しました。

僕自身、生まれてからずっと名古屋市で暮らし、周りに子どもはいるけど、子ども会はないというようなところでしたので、人と人とのつながりがある地域はうらやましいなって感じました。

「何してる人?」ナナメの関係で質問攻めに

――大学生が子どもたちと関わっていくことの意義を感じる部分はありましたか?

新見 全校児童が少ない小学校に学習支援に行ったとき、大学生が珍しかったのか、子どもたちから「お兄さん、何してる人なの?」「何好きなの?」と質問攻めにあいました。自分にとってはそれがすごく新鮮で。大学に入

るまで学習支援のことをほとんど知らなかったので、小中学生は「学校行って、家帰って…」の繰り返しだと思っていましたが、こうした道もあるんだっていうことを感じました。

中嶋 授業で放課後の学習支援やスポーツ活動に参加したのと並行して、個人的にも学童のアルバイトや不登校の子どもの居場所でのボランティアに参加してきました。感じたのは、小さいときからいろんな大人と関わることで世界が広がるんじゃないかなって。私自身が子どものころ、家族と親戚、ちょっと近所の人くらいしか大人と関わる機会がなかったので、そう感じたのかもしれません。

また、もし学校でうまくいかなくなったときに「もうダメだ」って考えになっちゃうのはすごくもったいない。学校以外にも居場所作りをしている大人はたくさんいるよっていうことは子どもたちにもっと知ってもらう必要があると思っています。

――森本さんは、学習支援活動を続けている岐阜県本巣市の広報誌（2024年7月）で、大学生ならではの「ナナメの関係」が築けると紹介していましたね。

森本 身近に頼れるちょっと上の存在がいるということは、子どもたちにとってすごく大事だなと思っています。

学習支援の現場で、勉強中に「ちょっと疲れた」って伏せちゃう子もいる。聞いてみると、「好きな子にフラれた」とか「家でこんなことがあった」って話してくれる子もいます。深刻度合いはさまざまですが、こうしたことをじゃあ誰に話すかってなったときに、学校の先生はある意味で権威を持った存在なので頼りづらいかもしれない。お家の人だと近すぎるかもしれない。じゃあ、わざわざ相談できる施設に行くかっていうとなかなかそういう気もない。

そうなったとき、近くに仲良くしてくれているちょっと年上の人がいる。話してみてちょっとでもスッキリしたなっていうことを感じてくれているのであれば、意義があるのではないかと思います。「ヨコでもタテでもない、ナナメの関係」というのは、子どもたちの心理的安全性という意味でも大事なのではないかなって感じています。

小川 ナナメの関係で言えば、自分たち大学生の側にとってもメリットがあると思いました。高校までは同年代との関わりがほとんどでしたが、子どもたちや企業の若手社員の方と交流することで視野を広げられる機会になったと感じます。

大学生・子ども・企業、それぞれの意義

――後藤先生は意義についてどうお感じですか?

後藤 関わる人の立場によってそれぞれの意義があるのだろうと思います。

大学生の立場から言うと、理論と実践はやっぱり違う部分があるので、現場に出ることで大学での学びを深める機会になる。学校外の子どもたちの様子を見ることができたり、地域の中で活動している方の存在を知ることが

参加者のみなさん

岐阜大学生

※50音順／学年は座談会時
①所属学部　②出身

小川 凌平さん（4年）
①教育学部　②岐阜県瑞穂市

加藤 凜花さん（3年）
①地域科学部　②岐阜県中津川市

鈴木 巳以南さん（3年）
①地域科学部　②愛知県西尾市

中嶋 萌さん（3年）
①社会システム経営学環　②岐阜県大垣市

新見 航海さん（3年）
①応用生物科学部　②岐阜県岐阜市

西谷 颯太さん（3年）
①地域科学部　②愛知県名古屋市

森本 圭祐さん（3年）
①教育学部　②愛知県北名古屋市

できたりする機会にもなると思います。

子どもたちの視点では、普段からお兄さん・お姉さんに当たる人たちと交流する環境が、どんな子どもにもあるわけではありません。そうした意味で、自分のキャリアを考える上での気づきやヒントを得られる機会にもなるでしょう。

――企業と一緒に活動した学生もいました。

後藤 企業さんからは、学生の視点が知りたいという声が大きいです。社員の方が業務として向き合っている発想とはまったく違うアプローチで意見が出てくることもあるので、イノベーションや新たな発想というところで得られるものがあるようです。

また、企業側から「社員の人材育成として考えている」という話を聞いたこともありました。学生と関わりながらプログラムを一生懸命考えることが社員自身の成長にもつながるという考え方です。最近、人材育成の観点で「越境学習」という言葉が注目されていますが、まさにそうした視点です。民間企業と大学とのコラボはさまざまな展開ができると思います。

岐阜大学担当教員

後藤 誠一さん
地域協学センター 助教、
ぎふ地域学校協働活動センター センター員

続けるために、何が必要なのか？

――子どもたちと関わる現場に出て、課題と感じる点はありましたか？

新見 学習支援の現場はどこも資金繰りが大変そうでした。あとは人材の確保。公民館活動などでは正規の職員さんがいらっしゃる場合もありますが、ボランティアやパート、アルバイトという形で関わる人がほとんどだったので。

鈴木 私は、やる気のある人が来ない限り活動が続かないというのが一番の課題と感じました。全国各地の子ども議会・若者議会を運営している方々のミーティングに参加したとき、「後継者がいなくて困っている」「新しいメンバーが入ってこない」という悩みを聞きました。自治体条例で設置が定められているような子ども議会なら存続性はありますが、そうでないところの苦労を強く感じました。

中嶋 大学にボランティア募集のチラシを置いても、なかなかそれだけでは反応がないという活動団体の声を聞いたことがあります。

加藤 子どもの数が減っている過疎地域での活動も、費用対効果の面から難しいだろうなと思います。交通の便が悪く、ボランティアで参加したくても行けないケースもあります。

――どういう活動であれば大学生が参加しやすいですか？

中嶋 知人からの紹介やつながりから始めるのが、自分で調べてコンタクトするよりもハードルは低いかなと思います。私も個人的に参加している活動は友人や恩師からの紹介がきっかけでした。

鈴木 ボランティアであれば、お金以外で自分が何を得られるのかっていうことがわかることが大事だと思います。大学の授業を受講すれば社会教育士の資格が取れるというように、学生側に何かメリットがあることがわかれば参加したくなるかなと。

企業の力が発揮できる場面はあるか

――子どもの居場所を広げ、充実を図っていくために何が必要でしょうか？

後藤 地域での学びの場を学校教育の延長線上としてとらえるのであれば、もっと公的な資金を投入する意義はあると私は思っています。日本の場合、教育に対する投資は他の先進国に比べて低い現状があります。教育への投資が未来につながっていくという考え方が、まだまだ社会全般で弱いのだと思います。ただ、税金ですべてをまかなうわけにはいかないので、クラウドファンディングや寄付といったところもうまく活用する必要が出てくるでしょう。

人材面では、興味は持っているけど動いてはいないという人たちにどう情報を届けるかが課題の一つです。現場で人材が不足しているからボランティアに来てほしいと思っていても、ただ来てほしいというだけでは来てくれません。PR戦略を考えたり、ちゃんと情報を発信したりして理解してもらうことが、活動団体や自治体にとって

は大切です。

大学生にとって現場の活動は貴重な機会にはなりますが、できるだけ学生の負担を少なくする配慮も求められます。アルバイトに代わるような援助だったり、夜間の安全面、移動手段の確保だったりというところです。学生にとっての学びの場、そして成長というところも考えていただけると、活動に参加する意義も感じ取ってもらえるでしょう。現場と学生、互いにとってのメリットをどう作れるかというところは、大学としても意識しなければいけません。

〈座談会を終えて〉

微笑ましくも頼もしい、大学生と子どもたちとの交流が目に浮かぶような座談会だった。地域に広がりつつある子どもたちの居場所に大学生が関わることは、座談会で挙がったように双方にとって意義があるのだろう。課題は、いかにしてこうした活動を広げ、続け、中身を磨いていけるか。オブザーバー参加したOKB総研調査部担当者からは「企業スポンサーが現れると現場の状況は大きく変わりそう」「活動現場と産業界の組み合わせを促すプラットフォームがあると、よい活動がもっと社会に浸透するのでは」といったコメントもあった。教育は官だけが担うものではなく、産も学も、そして地域も個人も果たせる役割があるのではないか。学生たちの言葉から、そんなことを考えさせられた。

※発言者名は敬称略
※座談会は2025年2月17日（参加学生4人）、19日（同3人）の2日間にわたって開き、各回の回答を誌面上で再構成した。

（注1）地域課題の解決に大学が持つ知見を活用しようとする文部科学省「地（知）の拠点整備事業（COC）」の枠組みで整備された岐阜大学の機関。産学連携のほか、学校を核とした地域づくりをめざす「地域学校協働活動」の県下における取り組みを支援している。※詳細はOKB総研HPに掲載中の「山学レポート④⑤」を参照。

山学レポート④
地域創生のための大学の役割とは?

山学レポート⑤
「地域」と「学校」の連携を促進する ぎふ地域学校協働活動センターが担う役割

（注2）学校以外の場における教育全般を指す社会教育の専門人材に向けた称号。従来は教育委員会の職務「社会教育主事」に就く際に必要な任用資格だったが、この任用資格に加えて2020年度からは所定の科目を修了した専門人材を指す称号となった。自治体や教育現場、NPOなどにおいて、地域コミュニティの活性化を担う役割を果たすことが期待されている。

一般社団法人 山学 代表理事
河合 達郎 氏

1987年5月3日 岐阜市生まれ
2006年3月 岐阜県立岐阜北高等学校 卒業
2010年3月 立命館大学国際関係学部 卒業

職歴
- 株式会社朝日新聞社（2010年4月～2021年3月）
- 岐阜県本巣市地域おこし協力隊（2021年4月～2024年3月）
- フリーライター、編集者（2021年4月～現在）
  2024年3月より、朝日新聞岐阜県版でコラム「無人駅から」連載中。
- tete.（2023年5月～現在）
  いちじくの栽培／加工／販売
- 一般社団法人 山学 代表理事（2024年3月～現在）
  学習支援／地域食堂／自然体験
  ローカル線・樽見鉄道の無人駅で開く学習支援の継続に向け法人化。本巣市内の30代3人で設立。中山間地の子どもに焦点を当てた活動を展開する。

山学レポート

いちじく農園「tete.」のホームページ

いちじく農園「tete.」のインスタグラム